

### 暖地水稻の安定多収技術確立に関する実証的研究

#### ( I ) 安定多収技術の総合化について

千葉 寛

(佐賀県農林部)

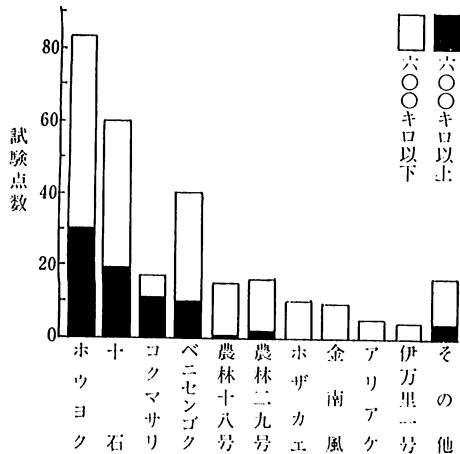
CHIBA, H.

Positive Studies on the Technical Establishments of the Stable and High Harvests of Paddy Rice in the Warm Region of Japan  
( I ) On the syntheses of techniques of the stable and high harvests

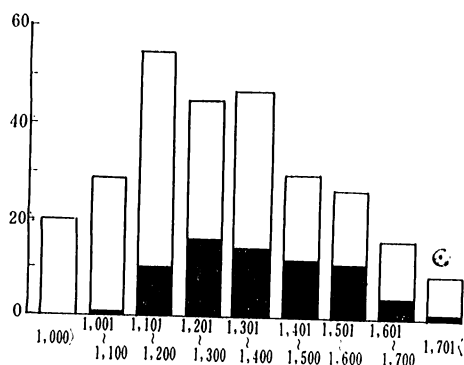
暖地水稻の安定多収技術確立を目的として、1960～1962年の3カ年、総合多収獲試験を県下の農協を単位として行った。61年は第2室戸台風によって、局部的に激甚な潮風害を生じたのでこれを除き、60年及び62年の2カ年に実施した278カ所の試験成績を検討したが、反収600kg以上の収量をあげた69点の栽培技術には、極めて共通する点があることが認められ、多収技術のありかたを示唆するものと考えられたが、その概

要は下図のとおりである。

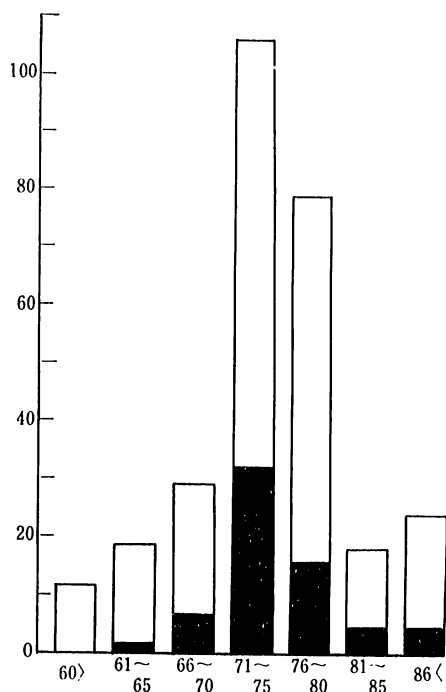
第1図 品種と多収の関係



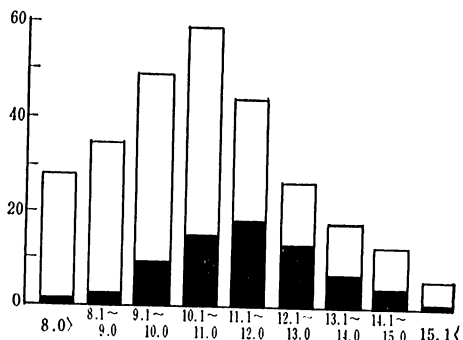
第3図 穂収と多収の関係 (本/3.3m<sup>2</sup>)



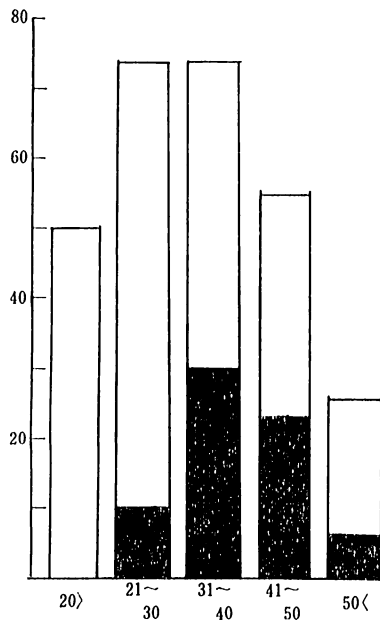
第2図 栽植密度と多収の関係 (株/3.3m<sup>2</sup>)



第4図 窒素施用量と多収の関係 (kg/10a)



第5図 穂肥の比率と多収の関係(%)



### 考 察

安定して600kgの反収をあげ得る、実用的な栽培技術の確立を目的として、多収穫栽培試験を行った。土壤条件を特に改良することなく、栽培技術の総合的な改善によつて、目的を達成しようと試みた。

栽培技術の中では、多収性品種の選定が決定的な条件で、ホウヨク、コクマサリ、十石等の短粒性品種を採用すること。次に栽植密度を3.3m<sup>2</sup>当り 70~80 株とし、穂数を1,200~1,400本程度にする。

施肥量は窒素成分を10a 当り 10~14kg とし、穂肥の割合を30~50%とする。

このような栽培条件で、水管理及び病虫害防除を適切に行えば、比較的容易に600kgの反収があげ得られるものと考えられる。